

## 『詩の力』を読む

吉本隆明著『詩の力』新潮文庫 平成二十一年一月一日発行

三六二円（税別）ISBN978-4-10-128924-3

Hideki ISHIKURA

石倉秀樹

吉本隆明著『詩の力』はいい本だ。原題が『現代日本の詩歌』であったように、現代の詩と短歌と俳句を平明な文章で通覧できるし、現代の詩の力の磁場が、どこを極としているかがわかる。そして、とりわけ俳句については、世上の常識あるいは固定観念といったものを、啞然となるまでに覆し、眼から鱗をはらりと落とさせる力がある。

『詩の力』で論じられている俳人は、主に次の四人。

「現代の短歌と同じような自在な試みを、俳句で行った人」として高柳重信、

「形式でも内容でも、近代以降の俳句がやったことをすべて総合しているといってもよい」夏石番矢、

「音数律以外の約束ごとを踏んでいない」ところが「新鮮」な角川春樹、

「戦後派の特徴である主観性の俳句」の西東三鬼。

吉本がこの四人を選んだ背景には、俳句を生むに到る日本の詩歌史が踏まえられている。「五・七・七ないし四・七・七の音

数律の歌を二人が応答しあう形式」だった片歌が、「一人の作者が一首のうちで問い、答える形になったものが短歌の始め」と吉本はいう。そして、上の句の五・七・五の問いかけが、下の句の七・七の「暗喩や直喩」へと変化し、「問いと答えのように並列しているのではなく、一人が上から下へ一行で詠みくだす構造」へとなる。この変化は、「五・七・五の上句と七・七の下句との間に深い息継ぎ、区切りがある」という「短歌の特徴」が壊れていく過程でもあり、室町期には、どこでどう区切ろうと、要するに五七五で終わろうと七・七で終わろうと同じ」になる。「なぜ、五・七・五・七・七まで必要なかが分からなく」なり、「短歌が壊れる段階」に到る。そこに、連歌、俳諧、俳句が生まれる。

短歌の特徴として上句・下句の区切りを挙げる吉本は、俳句では、主観と客観の並存を説く。吉本は、「俳句は、五・七・五のうち、たとえば最初の五が客観描写」なら、「後の七・五は自然詠であっても主観的な表現になっているのが特徴」といい、「逆に、五だけが主観的な表現で、七・五は、客観的であるというような区切りがつくのが、芭蕉や蕪村の時代から変わらないう俳句という詩形の常道である」という。そして、角川春樹の「俳句の新しさは、平明な口調で書かれていることと、一見すると俳句らしくなく受け取られるような作風」にあるとし、その特徴は、「俳句の常道である客観と主観の交代する組み合わせに寄らず、主観だけ、あるいは客観だけでできているような句によく表れている」とする。

また、西東三鬼も「伝統的な客観との対応性を無視してまで、主観的な作品をつくった」戦後派俳人である。

短歌が壊れ、また、俳句でも主観と客観の対応が崩れていく。そういうなかにあつて、高柳重信は、「俳句的な五・七・五を壊して短詩に近い作品をつくり」、「知的な人々に大きな影響を与えた。」

夏石番矢も、おそらくはその大きな影響を受けたひとりであるのだが、吉本が着目するのは、夏石が何を壊しているかではない。吉本は、夏石俳句は「一足とびに西欧の現代詩と同じ次元の表現をしたいというモチーフを持っている」といい、「これまでの前衛俳句が試みてきたことを全部やってみようとしている」ともいう。

そして、吉本が引用する夏石の句は、『巨石巨木学』から、

彼国微風吹動常立杉微塵

この句を吉本は、「古い巨木と新しい病（花粉症）の組み合わせのユーモアに俳味を見出している。」と評価する。「夏石さんの句は、一見するととんでもないものに思えるかもしれないが、よく読むと、前時代の前衛俳句よりも、むしろ俳句らしく音数律の枠を保って、わかりやすい」と述べる。さらに、

松風颯颯受諸苦惱御船石

この句について吉本は、「松風の音がしているという自然の描写、客観的な風景が、さまざまな苦悩という内面的なものに転調されている」といい、「芭蕉の作品を思い出せばわかりやすい

が、客観的なものを主観的なものに転調することでポエジーが生まれるというのは、俳句の特質」だとしている。

吉本は、これらの「助詞を抜いて」「すべてを漢字にし」「しかし、漢詩になったわけではない」夏石の句は、「まぎれもない日本語」の「粹だけを集めたように読め」、「日本語の中核だけを並べて」、「日本語の表記というものの根幹をついている」という。そして、

「夏石さんの言葉は日本語の音数律のなかで暴れていて、ギリギリの地点までいくのだけれど、それを踏み破ってしまうことはない。」「夏石俳句はバランスがよい。」

さて、このように見てくると、日本の俳壇の指導的立場にある金子兜太や有馬朗人などの名前が出てこないことが、興味深い。吉本は、『現代日本の詩歌』を劉覽しようとしたときに、そのもっとも先導的で特長的な位置に立つ俳人を二人だけあげるなら、角川春樹と夏石番矢をあげるのがよい、と考えたのだ。繰り返しになるが、「音数律以外の約束ごとを踏んでいない」ところが「新鮮」な、あるいは前衛的な角川春樹、

一方、すでに見たように、芭蕉以来の俳句を、その構造において継承している夏石番矢。

愉快ではないか。わたしたちは、角川春樹と夏石番矢を、吉本のように見ているだろうか。わたしたちは、作品の字面だけしか読めず、無意味な先入観などで、吉本とはまるで反対の見方をしてはいないだろうか。いや、そうは思わないという人は、改めて『詩の力』を紐解く必要はないだろう、しかし、もし吉本のいうことはおかしいと考えるなら、新潮文庫三六〇円余は、絶対にお買い得、熟読玩味の価値がある。